

2025年度多職種役割分担推進計画(2024年度の計画振り返りを含む)

計画番号	役割分担業務内容	関連部署	計画担当者	目標達成年次	2024年度の計画	2024年度の振り返り	2025年度の計画
1	初診時の予診の実施	医局 看護部 視能訓練科 事務職員	加藤部長	実施済 (2025年度も継続)	アイセンター以外の診療科では看護師が、アイセンターでは視能訓練士が継続して実施する。AI問診はDX推進室と協力しながら内科での利用を継続する。	初診時の予診は継続して実施できた。内科でのAI問診の利用は月平均124件であった。	引き続きアイセンター以外の診療科では看護師が、アイセンターでは視能訓練士が継続して実施する。AI問診は内科での利用を継続する。
2	静脈採血等の実施	医局 看護部 検査科	加藤部長	実施済 (2025年度も継続)	外来患者に対しては、点滴や静脈注射がない場合、臨床検査技師が継続して実施する。入院患者に対しては看護師が継続して実施する。	継続して実施できた。	引き続き外来患者に対しては、点滴や静脈注射がない場合、臨床検査技師が継続して実施する。入院患者に対しては看護師が継続して実施する。
3	入院の説明の実施	医局 看護部 事務職員	加藤部長	実施済 (2025年度も継続)	アイセンターでは外来看護師が、アイセンター以外の診療科では患者支援センターのスタッフが入院の説明を継続して実施する。入院時オリエンテーションは、病棟看護師と看護補助者が内容を分担して継続して実施する。	継続して実施できた。全科共通の入院から入院後までのオリエンテーション動画を作成し、病棟内での運用を開始した。	引き続きアイセンターでは外来看護師が、アイセンター以外の診療科では患者支援センターのスタッフが入院の説明を継続して実施する。入院時オリエンテーションは、病棟看護師と看護補助者が内容を分担して継続して実施する。
4	検査手順の説明の実施	医局 看護部 検査科 放射線科 視能訓練科 事務職員	加藤部長	実施済 (2025年度も継続)	医師や看護師が検査手順の説明を行っているものを検査ごとに見直し、整理して計画を立てる。必要に応じて各種検査の説明動画を新たに作成する。	放射線科で予約票の説明内容や注意事項、チェックリストを随時更新した。	引き続き医師や看護師が検査手順の説明を行っているものを検査ごとに見直し、整理して計画を立てる。必要に応じて各種検査の説明動画を新規作成する。
5	服薬指導	医局 薬剤科	後藤科長	実施済 (2025年度も継続)	外来患者と入院患者に対して、薬剤師が実施する体制を継続する。	継続して実施できた。退院時薬剤情報管理指導料の算定件数は平均月5.5件に増加した。全体的に、ハイリスク薬使用患者を対象とした特定薬剤管理指導料1の算定割合が増加した。	引き続き外来患者と入院患者に対して、薬剤師が実施する体制を継続する。ハイリスク薬使用患者への指導件数を増やす。

2025年度多職種役割分担推進計画(2024年度の計画振り返りを含む)

計画番号	役割分担業務内容	関連部署	計画担当者	目標達成年次	2024年度の計画	2024年度の振り返り	2025年度の計画
6	感染リスクの高い患者に対するTPN(中心静脈栄養)の無菌調製	医局 看護部 薬剤科	後藤科長	実施済 (2025年度も継続)	医師から依頼を受けた患者に対するTPNの無菌調製を継続する。 在宅患者のTPNの無菌調製の一部を院外処方箋で対応できるよう、近隣の調剤薬局と打ち合わせを適宜行う。	医師からの依頼に対して継続して実施できた。 近隣の調剤薬局が退院後のTPN管理とTPN調製を担うケースが徐々に増えてきた。	引き続き医師から依頼を受けた患者に対するTPNの無菌調製を継続する。 在宅患者のTPNの無菌調製について近隣の調剤薬局と適宜打ち合わせを行う。
7	腰椎圧迫骨折患者の入院期間短縮	医局 看護部 リハビリ科 栄養科 MSW	ケアステーション会合	実施済 (2025年度も継続)	入院早期より多職種が連携して対応することで、患者に最もよいプランで退院・転院支援が行える状態を目指す。 腰椎圧迫骨折のクリニカルパスの導入を検討する。 リハビリについては医師と相談しながら早期離床と積極的な歩行獲得を目指す。	腰椎圧迫骨折患者の全体の平均在院日数は平均29日で前年度より短縮した。 内訳として、自宅退院は2024年度は平均約25日、自宅以外への退院は平均約35日でいずれも短縮傾向である。	引き続き入院早期より多職種が連携して対応することで、患者に最もよいプランで退院・転院支援が行える状態を目指す。 院内連携のさらなる強化と、他医療機関や施設との連携強化による円滑な退院調整を推進する。
8	院外処方箋FAXの運用検討	薬剤科 事務職員	後藤科長	実施済 (2025年度も継続)	薬局窓口で説明を受けている患者のプライバシーが守られていない課題について、関連する職種で改善策を検討する。 患者に対して処方箋を送信できるスマートフォンアプリの案内を継続する。	スマートフォンアプリの普及により、院外処方箋FAXの利用者は減少傾向にある。 舌下免疫療法の患者については窓口ではなくおくすり相談室で説明している。	引き続き薬局窓口で説明を受けている患者のプライバシーが守られていない課題について、関連する職種で改善策を検討する。
9	小児近視外来の運用におけるタスクシフト	医局 視能訓練科	楯部長	2024年度	視能訓練士が医師と連携しながら当院の近視抑制治療法の説明、注文書作成、経過管理や結果説明、予約管理などの業務をトータルにサポートする。 経過観察患者を含めた小児近視外来の年間患者数と、新規患者に対し視能訓練士が治療法別にサポートできた件数を算出し評価する。	年間新規患者総数:102名 ・治療法別内訳:全体の約50%がオルソレンズを処方 ・今年度目標新規患者数100名を達成 年間来院件数:1133件 ・1,000件を超える外来対応を経験し、タスクシフトのアウトラインを確立できた。	2024年度で完了。